死神が旅行くラテールlife…って、はぁ！？

鮮血ニ笑ウ死神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
死神が旅行くラテールｌｉｆｅ…って、はぁ！？

【Ｎコード】
Ｎ０４３９Ｎ

【作者名】
鮮血ニ笑ウ死神

【あらすじ】
※　この小説は作者の想像　空想　幻想　妄想により書かれております。
読んでみて、「こんなのラテールじゃねぇ」って思った方は回れ右をして退出する事をオススメします。
それでも暇だから読んでやると言う方は読んでみて下さい。
因みにリアルで起こった事も書いているので全部が嘘と言う事はありません。
それでは読んでみて下さい。

プロローグ（前書き）

やってしまった…

書いてしまった…

まだ完結してないって言うのに新しい小説を書くなんて…

俺の馬鹿野郎！

……

まぁ書いてしまったものは仕方ないですよね？

完結するまでかんばるだけです！

それでは本編をどうぞ～♪

プロローグ

「スペシャルダ～イブ♪」

「げぼふっ！？」

気持ち良く寝ていた所に何処かの馬鹿女が俺の腹部に落ちてきた…

「もう！彼女の家にまできて昼寝ってどう言う神経してるの！」

「……なぁ？俺がいつお前の彼氏になったのか作文用紙３０枚に書いて説明してくれないか？」

「そんなに一杯無理だよ～！」

少なかったら書くのかこいつは…

俺は取り敢えず身体を起こして腹に乗ってる馬鹿女をどかした。

「所で物置を整理してたらこんな物を見つけたんだけど、これ何かな～？」

「ん？」

馬鹿女はそう言って一枚の黒いディスクを俺に見せてきた。

「なんだこれ？」

俺がそのディスクに触れようとした瞬間、ディスクから目映いばか

りの光りが放たれ俺達を包み込んだ。

「きゃっ！」

「っ！」

光りが消えるとそこにいた筈の二人は消えて静寂だけが辺りを包み込んでいた…

「ん…此処は何処だ？」

目を開けると真っ白い部屋にいた。

「あれ…？私達いつの間に引っ越したの？」

「……」

この女は…

こんな非現実的な事が起きたと言うのに早速ボケてきやがった…

「お前の思考回路は一体どうなってるんだ？一度脳外科医に行って

こい…」

「あ～酷～い！」

っと、そんな下らない話しをしていると…

「アハハハハ♪こんな所に飛ばされたって言うのに偉く余裕だね君達は♪」

「「ん？」」

後ろから聞こえてきた声に振り返ってみると小柄な少年が愉快そうな笑みを浮かべてこちらを見ていた。

「君は？それと此処が何処なのか知ってるならお姉さん達に教えてくれるかな？」

「僕の名前はエヌイって言うだ、ホントはもっと長いんだけどきっと覚えられないからそう呼んでね♪」

「よろしくね♪お姉さんの名前は「知ってるよ」っえ？」

エヌイと言う少年はそう言ってこちらに近づいてきた。

エヌイ　「犯されし聖女さんとそっちのお兄さんは鮮血ニ笑ウ死神さんだよね？」

その言葉に俺と聖女（取り敢えずは聖女って事にしておく）はお互いに顔を見合わせた後再度エヌイと言う少年に向き直った。

聖女「え～と、その名前はゲームのキャラ名で私達の本当の名前じゃないんだけど」

エヌイ　「知ってるよ、でも一応その名前に慣れてもらったほうがいいかな～って」

エヌイのその言葉に俺は眉を寄せて口を開いた。

死神　「それは一体どう言う意味だ？」

エヌイ　「それはね～あ！お兄さんの小説読ませてもらってるよ、続きが気になるからなるべく早く書いてね♪」

死神　「あ、ああ…って違う！話しを逸らさずに教えてくれ」

俺はそう言って脱線しかけた話しをもとに戻した。

エヌイ　「ごめんごめん♪それでこれが何だか解る？」

そう言ってエヌイは黒いディスクを見せてきた。

死神　「そのディスクの所為で俺達は今此処にいるって事以外は知らないな…」

エヌイ　「これはね～♪君達の世界にあるオンラインゲームって言うんだっけ？それをもとにして僕が作ったゲームなんだ♪」

死神　「おい、俺達の世界ってどう言う意味だ」

エヌイ　「君が書いてる小説に書いてあったじゃん♪世界は一つじ

ゃないって、此処まで言えば想像豊かな君なら解るをじゃないかな？僕が何者で此処が何処なのかも♪」

何となく嫌な予感はしていた俺はエヌイの言葉で肩を落とした。

死神　「はぁ～ファンタジーってゲームや漫画の世界だからこそ面白いってのに、まさか現実で起こるなんてな…」

聖女　「ねぇ、一人で納得してないで私にもどう言う訳なのか教えてほしいんだけど？」

聖女はそう言って何が何だか解らないと言った表情をしていた。

死神　「多分、俺達の目の前にいるこいつは神様で此処はそいつが瞬間的に創った世界でディスクの所為で此処に来たんじゃなくて、そいつが俺達に何か用があって俺達は此処に連れてこられたって訳だ…はぁ～これで合ってるか？一応多分きっともしかしたら神様かもしれないエヌイ君」

俺はやや自棄糞気味にそう言うとエヌイは苦笑して俺の言葉に肯定した。

エヌイ　「凄い言い草だね、もしかしなくても僕は神様だよ」

聖女　「凄～い♪よく解ったね、流石は未来の私のお嫁さん♪」

死神　「まあな…って、誰が嫁だ！誰が！お前のボケにツッコムのもいい加減疲れてくるぞ！」

聖女　「所で、その神様は私達に何の用なの？」

死神　「無視するなあぁぁぁぁぁ！！！」

エヌイ　「アハハハハハ♪ホントに君達は面白いね」

俺と聖女のやり取りが面白かったのかエヌイは腹を抱えて笑い出し、俺はそれを何処が面白いんだ？とでも言う風に睨みつけた。

エヌイ「え～実はこのディスクを僕がうっかり君達の世界に落としちゃったんだよね、って僕がそのディスクを見つけるのと君達がそのディスクを見つけるが同時でさ～丁度いいから君達を僕が暇潰しに作ったゲームに参加して貰おうかなって思って此処に連れて来た訳なんだよね♪」

死神　「いろいろとツッコミたい所があるんだけど「やりたいやりたいやりた～い♪」…なぁ？人が喋っている途中に横から口を挟まないでくれないか？」

俺は横から口を挟んできた聖女の脳天にチョップを食らわし言葉を続けた。

死神　「取り敢えずどう言うゲームなのか教えてもらえるか？」

エヌイ　「え～と、隣で悶えてる聖女さんは「スルーの方向で頼む」……そぅ、じゃあ話しを続けるね♪」

エヌイは同情の視線を送ったが俺にそう言われて話しを続ける事にした。

エヌイ　「君達の世界にラ・テールって言うオンラインゲームがあ

るのは知ってるよね？」

死神　「知ってるも何も、鮮血ニ笑ウ死神　犯されし聖女って名前は俺達がラテールで使ってるキャラ名だ」

エヌイ　「基本的にそれと同じだよ、ステージに敵の種類、後いろいろと改良したのがこれって訳♪」

そう言ってエヌイは俺に黒いディスクを投げてきた。

死神　「おっと、改良って…それじゃあ自分が作ったとは言えないんじゃないのか？」

エヌイ　「それが調子に乗って改良しまくちゃったんだよね～♪それで基のラテールとは少し？いや、大分かな？違うものになっちゃたから作ったって言ったほうが正しいんだよ」

死神　「……」

少し困った様な笑みを浮かべるエヌイを俺が冷ややかな目で睨んでいると横から伸びた手にディスクを取られた。

聖女　「何でもいいから早くやろうよ！」

エヌイ　「待って待って、慌てないで最後まで話しを聞いてよ、君達の中でのゲームって言うと大抵画面が目の前にあってその中にいるキャラクターを操作するって言う認識が強いよね？」

死神　「まあな、大体ゲームって聞くと少なくとも俺はそう考える」

エヌイ　「でもそれじゃあつまらないよね？僕が作ったこのゲームは今の感覚のままプレイできるんだよ♪」

死神＆聖女
「「？？？」」

エヌイの説明に俺と聖女は首を傾げた。

エヌイ　「簡単に言っちゃえば君達をゲームの中に閉じ込めるって事♪」

死神　「なっ！？」

聖女　「わぁ～！面白そう♪」

エヌイの言葉に俺は驚愕した。

……

え？

聖女？

ツッコムのに疲れたからスルー事にしましたが何か？

死神　「閉じ込めるって…俺達はちゃんと自分達の世界に戻れるんだろうな？」

エヌイ　「僕が創ったストーリーを最後までクリアーすれば戻れるよ♪」

聖女　「ねぇ！早くやろうよ～！」

俺はいつまでもテンションが高い聖女に溜め息をついてエヌイに向き直った。

死神　「やってもいいけど二つ質問と一つのお願いがあるんだけどいいか？」

エヌイ　「なんだい？」

死神　「まずは質問からな、俺達がゲームの世界に入ってる間は俺達の世界の事はどうなるんだ？それとお前が創ったストーリーをクリアーしたら何か賞品の様な物が貰えるのか？」

エヌイ　「え～と、最初の質問から答えるね？君達がゲームの世界に入ると同時に君達がいた世界には君達は最初からいなかったと言う事になるから大丈夫だよ♪賞品はストーリーを最後までクリアーしたら願い事を一つだけ何でも叶える事ができるから♪因みに願い事を聞き終わったら自動的に君達の世界に戻れるようになってるから安心してね♪もちろんちゃんと君達も存在してる事になってるから♪」

死神　「一応予想通りの返答だな、願い事は何でもいいんだな？」

エヌイ　「うん♪一つだけならね？」

死神　「よし、次に一つ頼みがあるんだけどいいか？」

エヌイ　「内容によるけど言ってみて？」

死神　「後二人ほどお前のゲームに巻き込mじゃなかった…連れていきたい奴らがいるんだけどいいか？」

エヌイ　「うん、それぐらいならいいよ♪連れていきたい人ってあの人達だよね？」

死神　「ああ、知ってたのか」

エヌイ　「僕は神様だからね、ちょ～と待っててね♪」

そう言ってエヌイが片手を上げて呪文を唱えた。

エヌイ　「チチンプイプイノ～プイ♪」

ズテン！

その呪文を聞いた俺は思わずズッコケタ…

死神　「なんだその手抜きな呪文は…」

聖女　「わぁ～♪私、魔法の呪文って生で見るの初めてなんだ～♪うん凄いな～♪」

エヌイが呪文（？）を言うと俺達の前に魔法陣が浮かび上がり目映いばかりの光りが放たれ、その光りが止むと…

ドテン！

死神　「げふっ！」

俺の上に人が二人落ちてきた…

「あっあれ？此処は一体何処なんですか！？」

「なぁ？すまねぇんだけどパニクるのは俺の上から降りてからにしてくれねぇか？」

「え？オーナー？どうして私の下敷きになっているんですか？」

「俺が知るか…とにかく重いからさっさと退いてくれ！」

「なっ！？重いってなんですか！？重いって！私そんなに重くありません！そんなんだからナンパしても誰も振り向かないんですよ！」

「なんだと！この貧乳娘！」

「なんですか！この変態エロ親父！」

「この幼女体型！」

「万年発情期！」

「小学４年生！」

「私は中二です！」

死神　「いい加減にしろおぉぉぉぉぉ！！！」

いつまでも、俺の上，で言い争ってる馬鹿二人に流石の俺も我慢の

限界を迎えた。

死神　「おいこらエヌイ！俺達の目の前に現れたあの魔法陣はブラフか！何で魔法陣からじゃなくて俺の上からこいつらが出て来るんだよ！」

エヌイ　「だって登場は派手な方がいいでしょ♪」

死神　「確かに目立つ登場だったけど何で俺が痛い思いしなくちゃならないんだよ！」

俺は上に乗ってる馬鹿二人を振りほどいてホントに面白そうな笑みを浮かべているエヌイに詰め寄った。

エヌイ　「まぁまぁ、それよりも後ろの二人に説明してあげてよ♪」

死神　「ん？」

俺が後ろを振り向くと二人は何がなんだか解らないと言った表情をしながらこちらを見ていた。

「おい、一体この真っ白い部屋は何なんだよ？」

「一体何が起きてるんですか？」

死神　「はぁ～、今説明してやるよ」

俺はそう言って今までエヌイから聞いた話しをそのまま二人に話した。

説明始めて約5分後…

「へぇ～面白そうだな」

「楽しそうです！」

俺の話しを聞いたこいつらは目を輝かせエヌイの方に歩いて行った。

「初めまして、私は「翼をもがれた天使さんだよね♪」っえ！？」

エヌイ　「君達はこれからゲームの世界に入るんだから今の名前は駄目だよ、それじゃあつまらないでしょ？」

「徹底してるな、それじゃあ俺は取り敢えず神殺しの使徒とでも名乗っておくよ」

エヌイ　「うんよろしくね、神殺しの使徒さんと翼をもがれた天使さん♪」

死神　「……」

聖女「どうしたの？」

何かを考え込んでいる俺を聖女が不思議そうに聞いてきた。

死神　「いや、ただ俺達のネーミングセンスの無さは壊滅的だなって思ってな」

聖女　「そうかな～？」

死神　「そうなんだよ、さてとエヌイ」

エヌイ　「なに？」

死神　「全員揃った事だし、そろそろお前が作ったラテールの世界に入りたいと思うんだけど」

エヌイ　「そうだね、それじゃあ皆聖女さんの近くに集合♪」

エヌイの言葉に俺達は聖女の近くに集まった。

エヌイ　「それじゃあ聖女さん、その黒いディスクを上に掲げて？」

聖女が黒いディスクを上に掲げるとディスクから光りが放たれ、俺達を包み込んだ。

聖女　「うっ！」

死神　「くっ！」

使徒　「おぉ！」

天使　「つっ！」

俺達はそのあまりの眩しさに目を閉じた。

エヌイ　「詳しい説明はあっちでやると思うけど最後に一つだけ言わせてもらうよ」

今までと変わりない笑顔だがエヌイの雰囲気が少し変わった。

エヌイ　「これはゲームであって遊びじゃない…それじゃあ頑張ってね♪」

死神　「それは一体どう言う意m」

エヌイがそう言うと死神は声を上げたが、最後まで言い終わる事がなく光りが強まり４人はエヌイの前から消えた。

エヌイ　「ふ…ふふ…ふふふ…アハハハハハハハハハハハ！！！」

死神達が消えた後、エヌイが狂った様に腹を抱えて笑い出した。

エヌイ　「これで役者が全員出揃った！さぁ、楽しい楽しいゲームの始まりだ！愚かで醜い人間共め！たっぷりとこの僕を楽しませてくれよ？アハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハッ！！！！！」

これから死神達の身に何が起こるのだろうか？

それは誰にも解らない…

ただ解る事は…

死神達の身に過酷な運命が待ち受けていると言う事だけだ…

プロローグ（後書き）

作者　「はい！初っ端から妄想力全開ですね！
物語りがあんな始まり方でいいのか？と自分でも思います！
でもまぁ…そこはこの作成力０の作者だからどうかご容赦して下さい！
さてと…もう一回言っておきますがこの小説は作者の想像　空想
幻想　妄想によって書かれています、コメディーの方は大抵実際にあった事をもとにしていますがストーリーの方は実際のラテールとは違うのでこんなのはラテールじゃねぇと言う方は回れ右をして退出する事をオススメします
自分でも酷い出来になる予感がするもので（笑）
それでも暇だから読んでやるよと言う方は読んでみて下さい
さてと少し長くなってしまいましたが次からいよいよラテールの世界に行く事になります
妄想力全開で書いていきたいと思いますのでどうぞ生暖かい目で見守って下さい
それでは皆さんまた次回まで～♪」

クエスト1：チュートリアル（前書き）

作者「読んでる人がいるのか気になる所ですがお久しぶりです！
今回も妄想をフル回転させて書かせていただきました！
それでは本編をどうぞ～！」

クエスト1：チュートリアル

死神　「それは一体どう言う意味だ！…って、はい？」

光りが俺を包み込んだと思ったら俺は空の上にいた…

……

ここで問題！

何の力も無い普通の人間が何の装備も無しに空中にいたらどうなるでしょうか♪

答えは誰だって解るよね？

そんじゃ答えは～！

死神　「落ちるうぅぅぅぅぅ！？！？！」

答えは落下でした～♪

解らなかった人は飛行機からダイブするなりして試してみてね♪

きっと俺みたいに落下してくと思うから♪

それじゃあ皆バイバ～イ♪

来世でまた会おう！

死神　「俺の人生ｂａｄ　ｅｎｄで終わりかよ！？ってもう地面がすぐそこだし！？さよなら俺の人生！そしてこんにちは俺の来世ライフ！」

っと、そんな意味不明な事を言っていると地面がもう目の前まで迫っていた。

そして…

ズドオォォォォ！！！

まるで隕石でも落ちた様な音をたてて俺は地面にぶつかった。

死神　「って、あれ？そんなに痛くないぞ？それにあの高さから落ちたって言うのに無傷だし…何でだ？」

地面もこれと言って凹んでいる訳でもなく頭に？を浮かべていると後ろから誰かが話し掛けてきた。

？？？　「やぁ！ようこそジエンディアへ！」

後ろを振り返ってみるとそこには全身赤タイツの変質者がいた。

死神　「……」

？？？　「ちょっと！？何で後ずさりしてるんだい！？」

死神　「いや、後ろを振り向いて見たらそこに全身赤タイツの変質者がいたら誰だって逃げよとすると思うんだけど…」

???　「誰が変質者だ！俺はアビオレンジャーのレッドだ！」

その言葉に後ずさりするのを止め、まじまじと目の前の変質者を見た。

死神　「（アビオレンジャーのレッド？そう言えばこいつの格好ラテールに出て来るアイツにそっくりじゃないのか？って事は俺はゲームの世界にやってきたのか？）」

俺がそう考えていると変質者（レッド）が近づいて来た。

変質者　「っで、君の名前は何と言うんだい？それと俺は変質者じゃなくてレッドだ！どうして俺の名前が変質者になっているんだ！」

死神　「???（こいつ何言ってんだ？）」

俺はよく解らない事を言っているレッドに首を傾げ、自分の名前を言おうとした。

そう…

言おうとしたんだ…

死神　「俺の名前は鮮血ニ「神ちゃんそこどいてえぇぇぇぇぇ！！！」…は？」

そんな叫びが、上、から聞こえて首を上げてみると尻が目の前にあった…

死神　「ぐぺっ！？」

聖女　「かっ神ちゃん大丈夫！？」

死神　「……↑（返事がない、ただの屍のようだ）」

聖女　「神ちゃあぁぁぁぁぁん！？！？！」

聖女の尻を顔面にもろに受けた俺は地に沈んだ。

……

誰だ今羨ましいとか思った奴は？

はっきり言って衝撃が半端ないぞ？

首も痛いし…

俺が地面に倒れていると第二陣がやってきた。

使徒　「危ねぇ聖女！そこをどけ！」

聖女　「ふぇ？ちょっちょっと待って！？きゃっ！」

聖女は後ろに跳ぶことでぎりぎり落下して来た使徒を避けることができた。

そう、聖女だけは…

死神　「こぶっ！？」

使徒　「あ…」

聖女　「かっ神ちゃん！大丈夫！？」

大丈夫なものか！

何でお前らは俺の上に狙った様に落ちてくるんだよ！

っと、言ってやりたい死神だがあまりの痛さに声もでないでいた。

使徒　「大丈夫か死神？」

聖女　「使徒さんが神ちゃんの上に落ちてくるから！」

死神　「……」

お前も落ちてきただろ！

と聖女に対してツッコミを入れたいがやはり痛みのあまり声がでないでいた。

俺は聖女を白い目で見ていたがそこであることに気がついた。

死神　「……（まてよ？聖女に使徒って事は次に落ちてくるのは天使じゃないのか…？やばい！これ以上ダメージを受けたらマジで死んじまう！どうにかして起き上がらないと！）」

俺は懸命に身体を動かそうとしたが指先一つ動かすことができなかった。

死神　「……（あれ…？これやばくね？何で身体動かないの？それにさっきから声もでないし…もしかして俺もう限界？今度こそさよなら？）」

そんな事をしていると上空から落ちてくる人影が見えてきた。

死神　「あれはもしかして…いやもしかしなくてもあれが誰なのか解ってるけどね…あぁ俺の人生も終わりか…いくら何でもあの高さからあの勢いで，頭から，落ちられたら俺死ぬよな～……ん？）」

ちょっと待て…

頭から…？

使徒　「おい…あの馬鹿気絶してないか？」

聖女　「流石にあの高さからあの勢いで頭から落ちたらやばいんじゃないかな～」

使徒　「いや、それは大丈夫じゃね？」

聖女　「どうして？」

使徒　「どうしても何も、まるで狙ったかの様に死神の腹に向かって落ちて来てるからな…多分死神が衝撃を吸収してくれるさ…」

聖女　「そっか～少し寂しいけど神ちゃんに立派なお墓建ててあげないとね…」

使徒　「そうだな…死神の死は無駄にはしない！必ずこのゲームをクリアーして死神に立派な墓を建てるぞ！」

聖女　「うん！」

死神　「ちょっと待てええええ！！！」

今まで聖女達のやり取りを聞いていた死神は身体の痛みも忘れ大声をあげた。

死神　「お前ら何勝手に俺が死ぬ事前提で話し進めてるの！？落ちて来てる天使を受け止めてやればいい話しだろ！」

聖女　「じょっ冗談だよ神ちゃん、私がそんな事する様に見える？」

使徒　「俺は本気だったけどな…」

死神　「おい！？」

使徒　「さてと…うちのお姫さんを助けるとするか、おい死神、お前いつまでそんな所で横になってるつもりだ？」

死神　「どっかの馬鹿二人の所為で身体が動かないんだよ！」

使徒　「だらしねぇ…それでも男か？」

死神　「……（こいついつかツブス）」

俺は殺気を込めた目で使徒を睨んだが使徒は気にした風もなく落ちて来る天使目掛けて走り出した。

使徒　「たくっ、ホントに手の掛かるガキだなあいつは…」

そう呟いて使徒は俺の腹を踏み台にして落ちて来る天使目掛けて跳び上がった。

……

俺の腹を踏み台にして…（※大事な事なので二回言いました）

死神　「ごふっ！！！？」

使徒　「うぉ！？なんだこりゃ！？」

聖女　「うわ～♪あんなに高く跳ぶなんて凄いな使徒さん」

使徒は２０メートル近く跳び上がりそのまま落ちてくる天使を受け止めてそのまま重力に従い着地した。

使徒　「ふぅ～、一体どうなってんだ？」

レッド　「それは俺が説明しよう！」

使徒　「うぉ！？なんだこの変質者！？」

レッド　「……」

空気になっていたレッドの存在に気付いた使徒はレッドから距離を取った。

聖女　「だっ駄目だよ使徒さん！行きなり初対面の人に変質者とか変態とか言っちゃ！もしかしたら病気で少し頭がおかしいだけかもしれないのに…」

使徒　「いや変態何て言ってないし…って、ん？お～いそんな所で何してんだ～？」

レッド　「……グスン」

聖女達の言葉で心のＨＰを大きくけずられたレッドは回れ右をして少し離れた所で蹲り『の』の字を地面に書きだした。

使徒　「……」

聖女　「えっえ～と…」

使徒と聖女がどうしたものかと考えていると使徒に抱えられていた天使の瞼がピクリと動いた。

そして…

天使　「私を食べても美味しくないですよおぉぉぉぉぉ！！！」

使徒　「うわっ！？なんだ行きなり！」

聖女　「あはははは…、気が付いたみたいだね…（どんな夢を見てたんだろう…）」

行きなり大声を上げた天使に使徒は驚き、天使は苦笑いを浮かべた。

天使　「あれ…？此処はどこですか？私確か光りに包まれて、それで…って、どうして私使徒さんに抱えられてるんですか…？」

使徒　「あ～それはだｎげふっ！？」

使徒が状況を説明する前に天使の右アッパーが使徒の顎にクリティカルヒットし、使徒はそのまま何メートルか吹っ飛んだ。

天使　「使徒さん…言い訳は結構です…私は全部解っていますから…」

聖女　「……（有無も言わさず右アッパーを叩き込んだのに言い訳も何も無いんじゃないのかな…？まぁいつもの事だからほっといても問題無いか…そろそろ神ちゃんを起こしてこよ～っと♪）」

天使は吹っ飛んで行った使徒の所に歩いていき、聖女は死神の下に近づいて行った。

天使　「倒れてる私を見つけた使徒さんは私の身体を嘗め回す様な目で見た後、終に自分の中にある変態的欲求を我慢できなくて私を抱き抱え、そして私の身体を弄ろうとした瞬間、まさに危機一髪で私は目を覚ました…これで間違い無いですよね？」

使徒　「最初から最後！何から何まで大間違いだあぁぁぁぁぁ！！！」

天使の間違った解釈に使徒はまるで獣の咆哮の如く大声を上げ否定

した。

一方聖女の方は…

聖女　「神ちゃ～ん？そんな所で寝ると風邪引いちゃうよ～？」

死神　「……」

聖女は死神の身体を揺すって起こそうとするが死神に起きる気配はなかった。

聖女　「もう神ちゃ～ん！……仕方ないな～」

聖女は揺するのを止めて徐にスカートについてるポケットに手を入れた。

聖女　「あれ？なにこれ？何処のお金？……まぁいいか♪」

聖女の手には金色の硬貨が握られていた。

聖女　「それ♪」

聖女は握っていた硬貨を地面に落とした。

チャリーン♪

死神「……！？」

硬貨の落ちた音がした瞬間、死神の目が勢いよく開き地面に落ちた硬貨が一瞬にして消えた。

聖女　「……」

死神　「例えどれだけ少ない額だろうが拾った金は俺の物だ！」

死神はそういいながら硬貨をズボンのポケットにしまった。

聖女　「……（相変わらず一体どんな反射神経してるんだろう、お金の落ちた音を合図に透かさず拾って立ち上がる何て…てか、お金の事になると神ちゃん性格変わり過ぎだよ…）」

そんな死神に聖女は何も言えずただ苦笑を浮かべる事しかできないでいた。

死神　「そう言えば聖女、使徒達は？」

聖女　「使徒さん達ならあっちにいるよ～♪」

死神にそう聞かれると聖女は笑顔で使徒達がいる方向を指差した。

死神　「……アイツら、もしかして揉めてるのか？」

聖女が指差した方向を見ると何やら言い争っている使徒と天使の姿が見えた。

使徒　「誰がお前みたいなガキの身体に欲情するか！この自意識過剰のロリロリ幼女！」

天使　「はぁ！？誰がロリロリで！誰が幼女ですか！貴方の目は腐ってるんじゃないんですか？よろしかったら良い眼科を紹介してあ

げますよ♪」

使徒「……（ブチッ…！）」

天使は眉を吊り上げた後、見下す様な笑みを浮かべて使徒を見ると使徒の中で何かがキレる音がした。

使徒　「……もう言葉はいらねぇな、おい糞ガキ…遺書は書いたか？」

天使　「遺書を書くのは使徒さんの方だと思いますよ？完膚なきまでに叩きのめして上げます♪」

そう言って使徒と天使は目だけで人を殺せるんじゃないかと言う目で睨み合い、拳を振り上げた…

所で死神と聖女が仲裁に入った。

死神　「ストップだ二人共！」

聖女　「ちょっと使徒さん大人気ないよ？」

死神と聖女が二人の中に割って入るが使徒と天使はまだお互いに睨み合っていた。

使徒　「だってこいつが…」

天使　「だって使徒さんが…」

そんな二人に死神と聖女は溜め息をついて口を開いた。

死神　「お前らはどうしてそうすぐに言い争いになるんだ？もっと仲良くできないのか？」

聖女　「天使ちゃん？使徒さんは天使ちゃんが空から落ちてきたから受け止めただけだよ？それなのに有無も言わさず相手に右アッパーを叩き込むのはどうなのかな～？それと使徒さんもだよ？天使ちゃんはまだ中学生なんだよ？少し大人気ないんじゃないかな～？」

使徒＆天使「「うっ…」」

そんな二人の言葉に使徒と天使は気まずそうな表情をしてお互いを見た。

天使　「うぅ…すいませんでした使徒さん…」

使徒　「いや、こっちも大人気なかったな…悪かった天使」

使徒と天使はお互いに謝罪の言葉を言い、死神と聖女はそれを見てやれやれと言った風に肩を竦めた。

聖女　「所で何か忘れてる気がするんだけど…なんだったかな～？」

少しして聖女が喋りだし何かを思い出そうと腕を組んで考えだした。

死神　「奇遇だな…俺も何か忘れてる気がしてるんだけどそれがなんだったのか解らないんだよな」

天使　「私も…」

使徒　「俺もだ…」

少しの間死神達が考え事をしているとどこからか声が聞こえてきた。

レッド　「グスン…どうせ俺なんて影が薄い空気野郎だよ…グスン…レッドなのに…一応リーダー的存在なのに…グスン」

死神＆聖女＆使徒＆天使

「「「「「……（忘れてたあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！？）」

声が聞こえてくる方向に目を向けて見るとそこでは今だに蹲り地面に『の』の字を書いているレッドがいた。

死神　「完全に忘れてたな…」

聖女＆天使　「「うん…」」

使徒　「てかアイツは誰だよ…」

死神の言葉に聖女と天使は頷き、使徒は疲れた様な目でレッドを見ながら尋ねてきた。

死神　「あの格好を見て気づかないのか？アイツはアビオレンジャーのレッドだよ、俺達はゲームの世界に来れたらしい」

使徒　「ほぉ～成る程な…にしてもアビオレンジャーのレッドってあんなキャラだったか？」

死神「ここは俺達が知ってるラテールじゃなくてエヌイが改良を加えたラテールの世界だからな、もしかしたらキャラの性格に多少の変化がでてるのかもしれないな…」

使徒　「多少…？」

使徒は‘あれでか？’と言った風にレッドを見ていた。
死神と使徒がそんな会話をしていると聖女が口を開いた。

聖女　「取り敢えずレッドさんの機嫌を直さないとね、いろいろと教えてほしい事があるし…」

死神　「そうだな」

そう言って死神達はレッドのもとへ歩いて行った。

レッド　「グスン…どうせ俺なんて…」

聖女　「ねぇ！見て見て♪こんなところにとってもグレートでビューティフルな格好をした素敵な人がいるよ！」

天使　「ホントです！凄くカッコイイです！情熱の赤って感じで惚れちゃいそうです！」

死神&使徒　「「……（えぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！？）」」

機嫌を直そうとしているのかレッドの格好を褒めまくる二人に死神と使徒は‘それは白々し過ぎるだろ’と言った風な表情をした。

死神　「……（いくらなんでも無理があるだろ！？）」

使徒　「……（そんなんで機嫌が直る奴いるのかよ？）」

死神と使徒がそんな事を思っているとレッドがゆっくりと立ち上がった。

レッド　「……」

聖女　「貴方は偉い！」

天使　「貴方は最高！」

そしてレッドはゆっくりとした動作でこちらを振り向いた。

レッド　「いや～♪そんなに褒められちゃうと俺照れちゃうな～♪」

死神＆使徒　「……（機嫌が直ったあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！？）」

聖女＆天使　「……（やった♪作戦通り！）」

あんな白々しい褒め言葉で機嫌を直すレッドに死神と使徒は驚愕し、聖女と天使は心の中でガッツポーズをとった。

レッド　「君達はこの服の良さがよく解ってるね！この服はただの服じゃないんだ！この服は耐熱性も抜群でマグマにも耐えられるようにできているんだ！」

死神＆使徒　「「……（すげえぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！？）」」

聖女　「そうなんだ～♪」

天使　「凄いです！カッコイイです！」

死神と使徒は口を開けて呆然とレッドと聖女達を見ている事しかできなかった。

レッド　「さてと、ではこの世界…いや、このゲームの説明を始めようか！」

レッドのその言葉で死神達は顔を引き締めた。

死神　「あぁ…」

使徒　「よろしく頼む」

聖女＆天使　「「よろしくお願いします！」」

死神達はそう言って横一列に並んだ。

レッド　「ではまずは君達の名前を教えてもらえるかな？」

死神　「俺の名前は鮮血ニ笑ウ死神だ」

聖女　「私の名前は犯されし聖女だよ♪」

使徒　「俺の名は神殺しの使徒だ」

天使　「私は翼をもがれた天使と言います！」

死神達の名前を聞いたレッドはそれぞれの顔を見た後口を開いた。

レッド　「鮮血ニ笑ウ死神、犯されし聖女、神殺しの使徒、翼をも

がれた天使か…俺はアビオレンジャーのレッドだ！君達にこのゲームの生き抜き方を教えるから心して聞いてくれ！」

死神＆使徒　「「あぁ！」」

聖女＆天使　「「はい！」」

レッドの言葉に死神達は元気良く返事を返した。

レッド　「まずこのゲームにはＨＰゲージやＳＰゲージ、ｘｐなんてものは存在しない！今までと同じように心臓や頭その他の致命傷となる傷を負えば死んでしまうから注意してくれ！」

その言葉で死神達の顔が強張った。

死神　「……（これは生き残るのは難しいだろうな…まぁゲームにクリアーすれば願いを叶えられるなんて事を聞けば命の危険性が出て来る事は解ってはいたけどな…大抵願いを叶えられるなんて甘い言葉にはそう言うのが付き物だ）」

レッドの言葉は続く。

レッド　「もちろん君達のようなただの人間が生き抜けるとは思っていない、だから君達をこのゲームの世界に送った神様は君達の中に眠る魔力を目覚めさせ、君達の身体能力を上げた、そう簡単に君達が死なないようにね？」

死神　「……（成る程、それであの高さから落ちてきてめ痛くもないし傷を負う事もなかったのか）」

使徒　「……（あの跳躍力はその所為って訳か）」

死神達の頭の中で先程の光景が浮かんび少しして聖女が口を開いた。

聖女　「ねぇねぇ！魔力を目覚めさせたって事は私達魔法使えるの？ド〇クエとかハリ〇ポッターとかにでてくるようなそんな魔法が！」

レッド　「それも今説明するよ」

興奮したような聖女の言葉にきっとレッドはマスクの下で苦笑でも浮かべている事だろう。

レッド　「じゃあ君達も知ってるようにスキルについて説明させてもらう！君達が知ってるラテールではスキルポイントを振り分けていろいろな技を習得していたけどこっちではそんなものはない！君達が魔法や技を使うにはイメージする事が大事だ！」

死神&聖女&使徒&天使

「「「「イメージ？」」」」

レッドの言葉に死神達はよく解らないと言った風な顔をした。

レッド　「そうイメージだ！一回やってみせるから見ていてくれ！」

レッドはそう言って横を向くと５０メートル先にいつの間にか現れた竹坊に右腕を向けた。

レッド　「レッドハイパースペシャルグレートファイヤアァァァァァァ！！！」

レッドがそう叫ぶとレッドの右腕から直径2メートル程の火球が現れ真っ直ぐと竹坊に向かっていき凄まじい爆音の後、竹坊は灰となった。

死神&使徒　「「……（ネーミングセンスの欠片もねえぇぇぇぇぇ！！！？）」」

聖女　「凄～い♪」

天使　「……（何ですかあれ！？ふざけた名前の割に強すぎなんですけど！？火球大き過ぎますって！）」

死神、使徒、天使の3人はただ呆然と竹坊がいた場所を見ていた。

レッド　「今俺は大きな火の球を思い浮かべた後、それが竹坊に向かって飛んで行く様を想像した、この様にイメージする事で技や魔法を発動する事ができる、実際のラテールにある技や魔法を使うのも自分でオリジナルの魔法や技を考えて使うのも君達の自由だ！それともう一つ！今俺はイメージする事で技や魔法を発動できると言ったが物には限度がある！明らか非常識なものや自分の力量にあっていないものはイメージしても発動できないから注意してくれ！同時に魔力が切れても技や魔法は発動しなくなるから使いすぎにも気をつけてくれ！」

死神達はレッドの魔法に驚きながらもしっかりと説明を聞いていた。

レッド　「さて次は君達の装備だが…残念だけど君達がゲームで使ってた装備をそのまま装備させる訳にはいかない！ここに俺が用意しておいた武具があるからそこから選んでくれ！」

レッドがそう言うとレッドの左の人差し指に嵌まっている指輪が光りを発し、死神達とレッドの間に大量の武具が降ってきた。

死神＆使徒　「「うぉ！？」」

天使　「きゃっ！」

聖女　「わ～凄～い！マジックだよ！マジック！」

レッド　「さぁ！この中から好きな武具を選ぶんだ！」

レッドの言葉に死神達は自分達の装備を選びだした。

数分後…

死神　「案外早く選び終わったな」

使徒　「やっぱり皆考える事は同じか」

天使　「そうみたいですね～」

聖女　「武器は違うけど武器の種類は皆ラテールで使ってたやつにしたんだね♪」

死神は２つの剣を…

聖女はメリケンサックを…

使徒は二丁拳銃を…
天使は本を…
それぞれ装備していた。
レッド　「皆何を装備するのか決まったようだね！でもいいのか？防具は着けなくて」
死神　「ゲームでならともかく実際に着るとなると動きにくいしな」
レッド　「そっか、君達がそれでいいなら俺は構わない、これは俺からの餞別だ！受け取ってくれ！」
レッドはそう言って右手を死神達の目の前に差し出した。
レッドの手の上には銀の指輪と金の指輪が２つずつ置かれていた。
使徒　「なんだその指輪は？わりぃけど俺は男から指輪を貰う趣味はねぇぞ？」
レッド　「安心しろ！俺も男に指輪を渡すようなそんな特殊な趣味は持ち合わせていない！これは手に入れたアイテムや装備を仕舞うのに必要なアイテムだ！その指輪をどれでも好きな指に嵌めてくれ！」
レッドのその言葉に死神と使徒は銀の指輪を、聖女と天使は金の指輪をそれぞれ左の人差し指に嵌めた。
レッド　「そうしたら今君達が持っている武器を思い浮かべてその

武器を仕舞うと願ってくれ！」

レッドの言われた通りにすると死神達が持っていた武器は光りに包まれ消えた。

レッド　「今度は今仕舞った武器を思い浮かべてそれを出したいと願ってくれ！」

レッドに言われた通りにすると死神達の手から光りが発し、手には死神達が持っていた武器が握られていた。

レッド　「そんな感じで手に入れたアイテムや装備を出し入れできる、覚えておいてくれ！それとこの指輪には決闘システムと言う能力も備わっている！」

死神達は出した武器を仕舞ってレッドの話しを黙って聞いている。

レッド　「君達参加者同士が力試しや何かを取り合い闘う場合、何処でも闘えるように結界を張る事ができる、その結果の中では特別なバトルフィールドが展開されていてそこで思う存分に闘えるんだ！結界の張り方は簡単で誰か一人が闘いを挑み、挑まれた方がそれを受ければ自動的に結果が張られる！これでその指輪についての説明は終わりだ！」

レッドが喋り終わるのを見計らい死神が口を開いた。

死神　「決闘についてだがそれは1対1じゃなくてもできるのか？」

レッド　「相手がそれを了承すれば例え2対1でも何対1でも可能だ！人数に制限はない！」

レッドの返答に死神達は少し驚いた顔をしたが、すぐにエヌイが改良を加えたラテールだと言う事を思い出し表情をもとに戻した。

レッド　「次は念話について説明しよう！」

死神＆聖女＆使徒＆天使
「「「「念話？」」」」

死神達が知ってるラテールでは聞いた事がない言葉に死神達の頭に？マークが浮かんだ。

レッド　「念話と言うのは君達の世界で言うチャットみたいなものだ！誰かを頭に思い浮かべてその人を思い浮かべたまま心の中で言葉を喋るとその人の頭に直接言葉を送る事ができるんだ！」

死神　「ほぉ～（ちょっとやってみるか…）」

レッドの説明を聞いた死神は念話を試そうと聖女を頭に思い浮かべた。

死神　「……（お～い、万年春真っ盛りのおめでたい頭の持ち主様聞こえるか～？）」

聖女　「ふぇ！？なにこれ！？神ちゃんの声が頭に響いてきたよ！？変な感じ～」

死神　「驚きすぎだ聖女…ちょっと念話って言うのを試しただけだ」

死神の念話で驚いた聖女だが死神がそう説明すると聖女は納得した

表情をした後、顔を顰めた。

聖女　「神ちゃん…万年春真っ盛りのおめでたい頭の持ち主って一体誰の事言ってるのかな～？」

死神＆使徒＆天使
「「「お前（聖女さん）以外にいるの（いるんです）か？」」」

聖女　「使徒さんに天使ちゃんまで酷いよ～！」

聖女の言葉に3人がハモって返答すると聖女は涙目になって拗ねたように口を尖らせた。

レッド　「え～と、話しを続けても構わないか？」

死神　「あぁ悪い続けてくれ、聖女はほって置いても構わないから」

聖女　「……神ちゃんって何か最近構ってくれなくなったよね？」

聖女が何か言っているがレッドは構わず話しを続けた。

レッド　「着替えとかは神様が君達の家から別空間に入れておいてくれたからその指輪で服を思い浮かべれば出す事ができるはずだ！それとラテールでの通貨だが、それは君達が実際のラテールで貯めた金額をそっくりそのまま着替えと一緒に入れておいたから必要な時に必要な金額を思い浮かべればでてくるはずだ！あぁ因みに死神君が持っているのがこのラテールでの通貨、Ｅｌｙだ！」

レッドはそう言って死神のズボンの右ポケットを指差した。
死神はポケットから金色の硬貨を出した。

死神　「これがＥｌｙか…」

死神は聖女達にも見えるように手の平においたが少ししてポケットに戻した。

レッド　「さて、これで大体の説明は終わった！これから君達には君達の物語りが始まるスタート地点に行ってもらう！あの光りの輪の中に入れば行けるはずだ！」

レッドがそう言うと死神達の後ろに光りの輪が現れた。

レッド　「準備はいいかい？よかったならあの光りの輪に向かって歩き出してくれ！君達の願いが叶う事を祈ってるよ！」

死神　「あぁ！」

使徒　「サンキュー！」

聖女　「うん！」

天使　「はい！」

レッドのその言葉に死神達は返事を返し、光りの輪へと歩きだした。

死神　「いよいよか…」

使徒　「なんだ死神ビビってるのか？」

死神の言葉に使徒が茶化すと死神は不敵な笑みを浮かべた。

死神　「ビビる？まさか！逆にこれから何が起きるか楽しみで仕方がないさ！」

聖女　「うん！私も何が起きるのか凄くワクワクしてるよ！」

死神と聖女の言葉に使徒と天使はまったくどう意見だと言うように頷いた。

死神　「それじゃあいつものやるか？」

聖女　「うん！」

使徒　「おぉ！」

天使　「はい！」

死神がそう言うと聖女達は左手を出してそれを次々に重ねていき、最後に死神の左手が一番上にくる形となった。

死神　「じゃあいくぞ？せ～の！」

死神＆聖女＆使徒＆天使

「「「「陽気に愉快に面白可笑しく楽しくふざけて行きますか！」」」」

死神達はそう言って光りの輪へと飛び込んで行った。

クエスト1：チュートリアル（後書き）

作者　「本編はどうでしたか？
聞き慣れない言葉がでたと思うのでこの後書きで説明させていただきます！
ではまずは念話についてですが…
これは完璧に魔法少女リリカルな○はにでてくるあれです！
これからもアニメネタを多数使う事になるかもしれませんがそこの所よろしくお願いします！
それと今度から死神達が念話で会話する時は『』で表示します
次は竹坊についてですがこれは実際のラテールで最初のチュートリアルやコロシアムと言うステージに出て来る竹の固まり見たいな奴です
このように実際にラテールをやっていないと何を言っているのか解らなくなるかもしれませんが、できるだけ後書きで説明させていただきますのでよろしくお願いします！
次は死神達が装備した武器が何かお教えします

死神：二刀→タリボン

聖女：ナックル→ナックルダスタ

使徒：銃→デリンジャー

天使：オーブ→光の古書

を死神達は選びました
さてと、今日はもうこれぐらいで失礼します！
それでは皆さんまた次回まで～！」

ブツっ……

クエスト2：始まりのベロス都市（前書き）

作者　「久しぶりです！相変わらず更新ペース激遅の鮮血ニ笑ウ死神です！しかも今回のは短いです！暇な方は是非読んでみて下さい！」

クエスト2：始まりのベロス都市

死神　「ん？ここは…」

異世界中から神によって集められた者達が願いを叶えるために最初にやってくる場所、ベロス都市。
光りの輪の中に入った死神達はいつの間にかそのベロスに来ていた。

聖女　「わぁ～♪人がいっぱいいるよ！」

使徒　「もしかしてここベロスか？」

天使　「私達が知ってる通りのラテールでしたら、ここはベロスでいいと思いますよ？」

死神達が立ち尽くしていると誰かが喋りかけてきた。

？？？　「君達も異世界から来たのかな？」

声がする方を振り向いてみると一人の青年がこちらに近づいてきていた。

天使　「え～と、貴方は？」

カイル　「あぁ、ごめんごめん、僕はカイルって言うんだ、カイル・シュラーゲン、カイルって呼んでくれて構わないから」

カイルと名乗る青年に死神達も名乗る事にした

使徒　「俺は神殺しの使徒って言うだ、使徒って呼んでくれ」

聖女　「私は犯されし聖女って言うだよ♪聖女って気軽に呼んでね～♪」

天使　「私は翼をもがれた天使っていいます、どうぞよろしくお願いします！」

死神　「俺は鮮血ニ笑ウ死神って名前で、死神って呼んでくれ」

死神達の名前を聞いたカイルはやや苦笑いを浮かべた。

カイル　「それって名前…？」

死神＆使徒＆天使
「「「まぁ…一応」」」

聖女「そうだよ～♪」

カイルの問い掛けに聖女以外は苦笑いで答え、辺りを見渡した。

死神　「ところで、周りにいる人達って皆エヌイに連れて来られた人達なのか？」

死神のその言葉にカイルも周りを見渡した。

カイル　「そうだよ、神様が創った物語りにクリアーすれば願いを叶えてもらえるのは知ってるよね？ここにいる皆は自分と同じ願いを持ってる人を仲間にしてゲームクリアーを狙ってるんだよ、まぁ一人でクリアーを目指すって言う人もいるけどね、それと神様が言

ってたけど中にはＮＰＣ（ノープレイヤーキャラ）って言うのもいるらしいよ？」

天使　『ＮＰＣもちゃんといるなんて以外にまともに作ってるんですね神様も』

死神　『まぁ一応ゲームだからな、ＮＰＣぐらいいるだろ』

天使からの念話に答え、死神はカイルを見据えた。

死神　「じゃあカイルも自分と同じ願いを持ってる奴を探していて、それで俺達に声をかけたのか？」

カイル　「違うよ、僕の願いは世界一の剣士になる事だからね、誰かと一緒にゲームクリアーしちゃったら世界一じゃなくなっちゃうよ」

カイルのその言葉に使徒がよく分からないと言った表情をした。

使徒　「じゃあなんで俺達に声をかけたんだよ？」

カイル　「う～ん、何となくかな？」

死神　「なんだよそれ…」

カイルの返答に俺はやや呆れ混じりに呟いた。

カイル　「あはははは…それじゃあ僕はそろそろ行くよ、いつまでもこんな所でのんびりしてられないしね、それじゃあ君達も頑張ってね、じゃっ！」

そう言ってカイルは死神達に手を振った後、何処かへと走り去って行った。

死神　「なんだか…」

使徒　「いい奴だよな」

天使　「ライバルになる私達にいろいろと教えてくれるあたり少し甘いような気もしますけどね…」

死神、使徒、天使の3人はカイルの背中を見送りながらそんなことを呟くのだった。

聖女　「う～ん」

天使　「どうかしましたか？聖女さん」

死神　「ん？お前が考え事してる何て珍しいな？何らかの災害が起きなきゃいいけど…」

聖女　「ちょっと神ちゃん？それってどう言う意味なのかな～？」

死神　「～～？」

俺の言い草に聖女は少し怒ったような顔をしたが俺は惚けた様に顔を背けた。

聖女　「もう神ちゃんたら…私だって時々考える事だってするもん、今だって自分のお願い事を考えてたんだから」

死神　「へぇ～それでお前はゲームクリアーしたら何を願うんだよ？」

聖女　「それが思いつかなくて…てへ♪」

死神　「……使徒と天使は何か叶えたい事ってあるか？」

俺は聖女をスルーして使徒と天使にそう聞いてみた。

聖女　「神ちゃんってホント最近構ってくれないよね…」

使徒　「俺は無いな、これだってお前らといれば面白そうだったから参加しただけだし」

天使　「私も見つからないですね…先輩は何かありますか？」

天使にそう聞かれ、俺は少し考えて、自分が一番欲しいものを言った。

死神　「俺は…やっぱり金かな、大金持ちになりたいな～」

天使　「やっぱり先輩はそれですか」

聖女　「最初から分かっていたけどね」

使徒　「むしろ死神と言ったら金だからな、死神から金をとったら何も残らねぇよ」

死神　「そこまで言うか？」

死神の願いを聞いた3人は苦笑いを浮かべ、死神は使徒を横目で睨んだ。

天使　「ところでこれからどうします？」

死神　「そうだな～取り敢えず戦闘に慣れるためにモンスターと戦いに行ってみるか？最初だし俺達の知ってるラテールならそこまで強いのはでないだろ」

使徒　「じゃあベロスをすぐ出た所にいるプリリンでも狩り行くか？」

聖女　「はじめての戦闘か～なんだかドキドキしてくるよ♪」

死神　「それじゃあいつものやる？」

そう言って死神達は円の形になって次々にお互いに片手をだし、それを重ねていった。

死神＆聖女＆使徒＆天使

「「「「陽気に愉快に面白可笑しく楽しくふざけて行きますか！」」」」

死神達は戦闘に慣れるためにベロスの外へと向かうのであった。

クエスト２：始まりのベロス都市（後書き）

作者　「更新するのも遅く、内容も短くて申し訳ありません！
別にリアルが忙しいから小説が書けないって言う訳じゃないんですよ？
ただ実際にラテールをやりながら自分の暇な時を見つけて、ちょくちょく書いているので何ヶ月も掛かってしまう訳でして、本当にすいません！
でもラテールは本当に面白いのでＰＣを持っている人は是非プレイして見てください♪
それでは皆さんまた次回まで～♪」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0439n/

死神が旅行くラテールlife…って、はぁ！？

2011年10月6日11時08分発行